

水の眠り 灰の夢

Natsuo Kirino

桐野夏生



文 春 文 庫

みず ねむ はい ゆめ
水の眠り 灰の夢

定価はカバーに
表示してあります

1998年10月10日 第1刷

1999年8月5日 第4刷

著 者 きり の なつ お
桐野夏生

発行者 白川浩司

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102-8008

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-760202-4

文庫

水の眠り 灰の夢

桐野夏生



文藝春秋

目次

水の眠り 灰の夢

解説 井家上隆幸

水の眠り 灰の夢

一九六三年九月

1

熱風と轟音^{ごうおん}が開け放たれた窓から入ってくる。

地下鉄はどうも好きになれない。村野は風であおられる頁を両の指で押さえ、苛立ちを堪えながら朝刊紙を読んでいた。九月五日午後八時過ぎ。こんな時間に朝刊を読んでいる人間なんていやしないが、目を通す暇がなかったのだ。脇の下には、サマーウールの上着と共に買ったばかりの夕刊紙もしっかりと挟まれている。

今日、木曜は『週刊ダンロン』の校了日だった。徹夜で原稿を書いて朝一番で入稿し、夕方起きだして神田の印刷屋に出張校正に行く、という目まぐるしい一日がようやく終わったところだ。

解放感はあるものの、一晩中原稿用紙に向かっていた疲れが澱^{おり}のように頭の芯に滞^{とどこお}っている。だがこれで、時間と戦うという身の細る思いとは少し離れていられるのだ。

ほんの一日に過ぎないが、原稿を入れたこの日だけが村野に束の間訪れる安寧の時間だった。

しかし、普段の癖で、何かネタになる記事はないかと貪^{むさぼ}るように新聞を読んでしまう。いつも獲物を嗅ぎつけた猟犬みたいに耳が立っている、そんな冗談を後輩に言われたことがあった。

社会面の「釣りの小学生が海に投げ込まれる」という山口県での記事に目を引かれた。このところ頻発しているいやがらせ犯罪かと思ったのだ。数年前から、雑踏に花火を投げこんだり、日劇で催涙液を流したり、と死傷者は出ないものの悪質ないたずらが続いていた。昨年から世間を騒がせている爆弾魔「草加次郎」事件もそうだ。

これらの事件との関連で世相物を一本書けるかもしれない、と村野は思った。が、よく読んでみると、酔っ払いが小学生を海に突き飛ばしただけのことらしい。悪質だが、三段抜きの見出しをつけるほどでもない。「冷たい海」と記事にあるが、昨日は山口県もまだ暑かっただろう。最近のブンはどうも大仰過ぎる、俺たちトップ屋の影響だろうか、と村野は苦笑した。

「国鉄う、負けんなよ」

ワイシャツの袖をまくりあげた隣の男のつぶやきが聞こえてきた。スポーツ新聞をがさがさと広げて読んでいる。村野は昨日の時点で、中日が首位巨人に二ゲーム差に追いついたことを思い出した。その記事をまだ読んでいなかった。窓からの風に逆らって慌

てて新聞をめくる。大きくへ中、決勝の三塁打とある。中日ファンの村野は思わずにやりとした。巨人は七連敗中だ。これは二リーグにわかれてからの新記録らしい。今夜は川崎球場で大洋・巨人戦、追う中日は神宮で対国鉄との試合を今やっているはずだ。今夜の中日はたぶん、権藤でいくはずだがどうだろう。

村野は隣の男の真剣な横顔をちらっと見た。国鉄・中日戦で国鉄を応援するということは、中日の追い上げを心配している巨人ファンなのかもしれない。『路子』に着いたら、真っ先にナイターの結果を聞いてみよう。これからトップ屋の集団へ遠山軍団のみんなと銀座の馴染みの店で落ち合い、徹夜で酒を飲むことになっている。それが校了日の習慣だった。

その時突然、パッと車内の照明が消えた。地下鉄銀座線にはよくあることだ。村野は新聞から目を離した。再び照明がついた時、同じ一両目の車両の中を見るときもなく眺めた。車内の混みは半分程度。五、六十人ほどの乗客のほとんどが座っている。疲れた様子で眠りこんでいる者も多かった。勤め帰りの会社員ばかりだ。

ふと最後部の座席下に新聞紙の包みが置いてあるのに気づき、何となく気になった。そばの女の持ち物か。いや、それにしてもは新聞紙の包みというのが妙だし、ゴミにしてはきちんとするのである。捨て忘れた生ゴミのような嫌な印象があった。

急にトンネルを抜けたように車内が明るくなった。京橋駅構内に滑り込んだのだ。「きょうばしー」という間延びしたアナウンスと同時にドアが開き、数人が降りてまた

数人が乗り込んだ。

ドアが閉まろうとした瞬間、「ガーン」という大音響と共に、青白い閃光^{せんこう}が車内に走った。

「爆弾だ！」

誰かが叫び、皆、われ先にと開いたままのドアからホームへ飛び出した。村野も思わず走りかけたが、白い煙が立ちこめるなか、へたりこんでいる女の白いスカートが血に染まっているのが見えたのでそちらへと向かった。

爆発は一両目最後部の左側らしい。そのあたりは怪我した乗客が血まみれになって呻^{うめ}き、新聞紙の破片と金属片のようなものが散乱していた。村野は自分が見た新聞紙の包みが爆発したことを確信した。あの時に覚えた嫌な感じが的中したことに驚きがある。村野は腰を抜かした中年の女に駆け寄った。

「大丈夫ですか」

「あ痛っ」

女は両足から血を流して呻き続けている。新聞紙の包みの近くに腰掛けて読書していた女だ。ずたずたになったナイロンストッキングにたくさんの金属片が刺さっているのが見えた。

「一体、何が起きたの」

女は動転したように村野に問うと、自分の足の怪我を見て悲鳴を上げた。

「ホームに運び出しましょう」

喪服を着た初老の男が村野に提案した。村野は頷き、怪我した女を両脇から支えてホームに運んだ。ほかにも怪我をした人たちが駆けつけた駅員や乗客に運ばれてホームに横たえられ、あちこちには小さな血溜まりができていた。「救急車！」と誰かが叫んでいる。車内にはまだもうもうと煙がたちこめ、あたりには火薬の強い匂いが充満していた。村野の耳も少し遠くなっている。

「時限爆弾ですか」

ホームに立って茫然としていると、一緒に女を運んだ喪服の男が村野に話しかけてきた。

「そうかもしれませぬね」

最初に新聞紙の包みに気づいた時は何事もなかったのだから、時限装置でもついていたのか、あるいは偶然爆発したのか、そのどちらかだった。

「あたしはガダルカナルの生き残りだから、ちよつとやそつとの爆弾じゃ驚きませんが、まさか地下鉄で遭うとはねえ」

男はしわくちやのハンカチで汗を拭う。村野は思わず尋ねた。

「どのあたりに座っていらしたんですか」

「そこんですよ」

男は、車両の真ん中より後部寄りの座席を指さした。村野は一両目の二番目のドア付

近に腰掛けていたから、男は同じ座席のもっと爆発物寄りに座っていたことになる。

「爆発物らしい物をご覧になりましたか」

「いや、ずっと寝てたから。あたしは最初、座席のスチームでも爆発したのかと思った」

村野は男の背広に無数の細かい焼け焦げがあるのに気づいた。

「ここ、焦げてますよ」

「ああ……」と男は驚いたように穴を眺め、それからつぶやいた。「今日は暑いから喪服なんか着るの嫌だったんですが。上着を持っているのも邪魔だし、着ていたから怪我しなかったんだねえ」

「その通りですよ」

「葬式に感謝しなくちゃ」

無数の焼け焦げを見て、男の汗は流れる速度をはやめたようだ。男はせわしくハンカチを使っている。駅の構内が異常に暑い。ふと見ると、いつの間にか周りを弥次馬が取り囲んでいて、ただでさえ暑い地下の空気がどんよりと淀んでいるのだった。拳銃を右手で押さえながら、数人の警官が前方の階段を駆け降りて来るのが見えた。

警官が来て制止される前にもう一度現場を見ておこうと、村野は停車したままの地下鉄に再度入って行って爆発現場を眺めた。場所はやはり新聞紙の包みが置いてあった一両目最後部の左側に違いない。その座席のあたりは、下部が少しへこんで塗料が剥^はげて

いる。

床には金属片と新聞紙が散乱し、血が飛び散り、惨状としかいいようがない。しかし、爆発力そのものはたいしたことはなさそうだ。村野の頭のなかに、当然のことのように爆弾魔〈草加次郎〉の名が浮かんた。つい七月にも東横百貨店へ爆破脅迫騒ぎがあり、〈草加次郎〉の仕業ではないかと疑われていたばかりだった。

「そこから出てくださいよ」

到着したばかりの興奮した警官に邪険に追い出された。仕方なしにホームに出て、まだ何が起こったのかわけがわからないという表情の怪我人に尋ねまわった。

「あそこに新聞紙の包みを置いた人を見ませんでしたか」

ほとんどが首を横に振った。が、腕と顔を怪我して、ズボンからまだきな臭い煙が出ている若いサラリーマンらしい男がこう言ったのでメモした。

「僕は浅草から乗ってましたけど、男の人があの包みを持って立っていたような気がします」

「幾つぐらいの人ですか」

「さあ、幾つかなあ」と男は首を傾げた。^{かし}「後ろ姿なんで、はっきりとはわかりません」サラリーマンは困ったように怪我した額のあたりをさわった。そこには応急処置で、血染めのタオルを巻いて留めてあった。

「その人はここにいませんか」

愉快犯ならばこの現場にいて、皆が右往左往するありさまを眺めていやしないかと思つたのである。サラリーマンはあたりをぐるっと見まわした。

「いや、いないようですね。今、降りた様子もなかったから、少なくとも京橋の前の駅、日本橋までには降りていた、ということですよね」

「じゃ、包みを置いたところは見ましたか」

「いやあ、全然気づきませんでした」

村野がメモを取っているので、刑事だとも思ったのかサラリーマンは協力的だった。「服装をもっと詳しく」

「そうですね」と考えこんでいる。「僕らみたいなのかな。どうってことない会社員で感じですよ」

男は、ホンコンシャツといわれている半袖の白いワイシャツに黒っぽい柄の地味なネクタイ、グレイのズボンという典型的な勤め人の夏の格好だった。村野は溜め息をついた。村野がこの電車に乗ったのは印刷所のある神田からだだった。せつかく事件のあった地下鉄に乗り合わせたのに、その男をまったく覚えていないのが残念だったのだ。村野は礼を述べながら男の連絡先を尋ねた。彼は二十五歳の都市銀行員だと名乗った。

「おい、ブンヤさんか」

いきなり背後から肩をたたかれた。経験から、村野は警官の声だと感じて振り向いた。はたして、中央署の刑事だった。たしか市川とかいったはずだ。いつも灰色の鳥打ち帽

を被っているのでよく目立つ。昭和三十五年に京橋署と日本橋署が合併して中央署となったのだが、その時の取材で彼を紹介されたことがあった。

それから取材で時々中央署を訪れる村野は顔を知っているが、向こうは思い出せないらしく首を捻った。白い開襟シャツの胸ポケットから、紐付きの黒い警察手帳が透けて見えているが気にもとめていない。

「あんた、どこの社だっけな」

村野は懷を探って名刺を差し出した。名刺には、『週刊ダンロン 特約記者 村野善三』とある。市川は一目見るなり、こう言った。

「なんだ、トップ屋か」

その口調に輕蔑と揶揄が混じっているのを村野は聞き逃さなかった。トップ屋というと、人のスキャンダルをほじくりだし、ネタを掴むためにはどんなこともし、場合によっては弱みにつけこんで脅迫まがいの阿漕な仕事をしている、と思われているところがあった。たしかに同業者の中にはそういう人間もいる。だが、ほとんどは村野のような若いフリーランスの取材記者だった。村野は思わず苦笑しかけたが、市川の思い込みを利用することにした。そういうイメージを持っている人間にはよく思ってもらおうなどと考えず、プロとして振る舞ったほうがいい結果が得られる。

「何か出ませんか」

「まだ何も出ないよ。それより、随分早いじゃないか」